

では現代語の敬語の指導がさらに少ない。小・中・高等学校での敬語指導の一貫性を高め、実用的な知識をしっかりと定着させる必要性を提案している。

気になるのは「敬語」の指導が断片的に見えてしまうということである。(中略) 小学校6年生の教科書には、「言葉の使い方」の中にも「敬語」は出てきていない。そして、次に登場するのは中学校2年生の教科書である。そうすると、指導が断片的になっているのではないかと危惧される。

また、もう一つ気になるのは高校での「敬語」の指導である。『現代の国語』や『国語表現』で敬語に関する記述はあるが、実際の授業で「敬語」を扱う機会というのは、ほとんどないのではないかと想像する。
[レポートより]

小中高、それぞれの立場で、どのような「敬語」の指導がなされているのか、またどうあるべきかが、議論の中心となった。

◇小学校の段階では尊敬語と丁寧語を中心にやっていて、謙譲語は付け足し程度にやっている。檜山で「先言後礼(立ち止まって『おはようございます』と言い終わってから礼をする)」なる変な取り組みがされている。無知な管理職が、それがカッコいいと思って、いくつかの学校で取り入れられているようだが、これを強要するのは形にこだわるだけでまったく心が育っていない。敬語で気持ちを伝えることが大事で、形式的な敬語は慇懃無礼である。

◇謙譲語は「へりくだる」ものではなく、動作の受け手に対する敬意を示すものであり、「へりくだる」ことが本義の丁寧語と区別されねばならない。敬語は言葉遣いの問題ではなく、「こういう言葉を使うことによって、円滑なコミュニケーションができる」という視点で指導していかないといけない。先生に対して敬語を使えとかって、上から目線の形式的な言い方になっても、生徒にはまったく理解できない。
[参加者の意見より]

(3)音声・音韻ならびに表記と書き手の意図

池田和彦(深川西高等学校)

日本語の教育において、文法や語彙だけでなく、音声・音韻と表記の関係を学ぶ必要がある。3年生の学校設定科目「国語教養(実用国語)」において、これを取りたて指導した授業記録である。単音を理解するためのなぞなぞを用い、逆再生ソフトを使用して音声の実験を行い、生徒の興味関心を喚起する。

さらに、特殊なカタカナ、ひらがな、漢字、ローマ字表記が用いられている作品を通して、それぞれの表記を用いた筆者の意図に迫り、特殊な表記の意図を整理した。また、表記と音声・音韻の関係は、文学作品の深層にまで影響を与える。横光利一「頭ならびに腹」、萩原朔太郎「遺伝」、入沢康夫「わが出雲」などの作品のよみを通じて、表記と音声の結びつきを考えることが、作品の深い理解に不可欠であることを理解させる。

音声を持たない言語は存在しない。言語の根幹となる単語は、特定の物象が、特定の音声と結びついたものであって、文字は本来、単語の音声を表す記号としての性格が強いのである。(中略)

国語教育を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に分割して指導しようとする学習指導要領が、いかに言語の本質を無視したものであるかは、この音声と表記の結びつきだけを考えても明らかだろう。子どもたちに確かな国語の力を身につけさせるためにも、まずは私たちが、学習指導要領による貧弱な言語観から脱却しなければならないはずである。
[レポートより]

特に表記の問題に関しては、これまでまとめて整理された文献がほとんどないが、とりわけ文学作品のよみにおいては、理解が必要なものである。

◇小学一年生の指導では、教科書だけでなく、岩館登著『ひらがな教室』を使用し、長音・拗音・促音なども、言葉を手で打つことから始め、大事に指導している。

◇「よくぞここまでまとめて整理していただいた」と、こちらが感謝したいぐらいの内容だなと思った。
[参加者の意見より]

表現・作文——書き綴ることは、生活をみつめること。子どもたちの成長を支える指導を

小学校2本、高校1本。いずれも、生徒の内発的な要求を無視して形式的な文章を書かせる、学習指導要領に忠実な授業ではなく、生徒の肉体的成長をささえる、本来の意味での「作文指導」になっている点に注目したい。

(4)表現の喜びを感じ、楽しく書くことを目指して

齋藤鉄也（全釧路教職員組合）

学校で生活作文を書くことが難しくなっている。学校のスタンダード化が進み、個性や創造性が抑圧されている。また、過度のICT化により、手書きの機会が減少し、表現力が育ちにくくなっている。このような中で、子どもたちが表現することの喜びを重視する必要性が強調されている。

大事にしたい作文教育の考え方は、書き手の認識を読み手に伝える「達意の文章」ということです。子どもの表現には、どんなにつたないものであっても、そこには子どもの意図があり、認識が表現されています。ですから、まずは教師が、子どもの認識を読み、子どもの姿の真実を読み取ることが必要です。表現のつたなさは、ここでは問題にするべきではなく、国語科教育全体の中で扱っていきます。

1年M子は、遠足の作文を次のように書きました。

えんそくを、がんばった(1年・M子)

えんそくで、ちゃんと、あきらめないで、さいごまで、いしの、さかのところで、あきらめないで、ちゃんともうやすまないで、がんばって、いっしょうけんめい、いしの、さかでちゃんとあしに、ちからを、いれて、いしの、あるところの、さかに、ちゃんと、あしに、ちからをいれて、さかで、がんばって、あきらめないで、いっしょうけんめい、がんばりました。

この作文を見ると、表現の稚拙さに目が行きがちです。

①同じ言葉が何度も使われている ②「、」が多い ③文が長く、「。」が一つしかない

しかし、子どもの表現には必ず意味があります。別の言い方をすれば、そうした意味を見出すような読みをするということです。表現の稚拙さのように見える点も、次のように意味づけることができます。

①同じ言葉が何度も使われている＝イメージが強調される

「いし」「さか」…歩く道の大変なイメージ

「ちゃんと」「あきらめないで」…苦しくてもがんばるイメージ

②「、」が多い＝「、」のたびに間を取って読む

その「間」が、一步一步力を入れて歩いているイメージとして読むことができる

③文が長く、「。」が一つしかない＝最後まで文が途切れない

最後まで文が途切れないので、休まずにがんばって歩いているイメージ 【レポートより】

また、教育活動全体の中で作文教育を位置づけることを齋藤氏は力説する。子どもたちが「書きたい」「伝えたい」と思う感動体験が重要であり、感動体験が豊かな表現を生むことが期待される。そのため、齋藤氏はカイコの育成と観察、学校の農園でのカレー作りなど、子どもたちが表現の喜びを感じるための具体的な取り組みを、学校生活の随所に仕掛けている。結果として、子どもたちが作文を通じて自分の思いを表現し、他者との関わりを深めた。また、書くことを楽しむ姿勢が生まれ、主体性が大きく成長した。齋藤氏も子どもたちの成長を実感し、教育実践の意義を再確認することができた。

◇自分も「生徒たちに表現する力、身につけさせたい。」という目標を持って、取り組んできたが、齋藤先生がずっとおっしゃっていたことと同じである。表現の技術ではない。表現しようという人間の内部で動くものを育てていくことが基本だと思う。これは小学校だろうが高校だろうが変わりはない。

◇自分の内面的なものをストレートにそのまま表現してくれるような作文を書いてほしい。高校になった時に、そこまでに積み上げてきた作文の活動が、齋藤先生みたいに素晴らしい活動であるならば、そうやって書いてくれるはずだ。 【参加者の意見より】

(5)学びをくぐした生活綴方～『かぼちゃのつる』と『子どもの権利条約』～平川美和（空知作文の会）

今年の平川氏の報告は、道徳の授業からであるが、昨年と同様に、生活綴方を通じて、生徒の人間的な成長を促す創造的な授業を展開しており、国語教育においても、学ぶことの多いものである。

小学校1年生の道徳教材として悪名高い(?)「かぼちゃのつる」、指導書通りなら「わがままはいけない」という徳目を教えるだけのものだが、平川氏はここに「子どもの権利条約」の内容を、小1の子どもたちにもわかりやすく指導することをあわせて、子どもが主体的に考える授業を展開している。

まずはかぼちゃを育てるところからはじめ、そのつるが他学年の畑や通路に伸びたことで、この話と

同様の問題に直面させている。「子どもの権利条約」から「命を守られる」「意見を言える」などの権利を学び、かぼちゃの状況と照らし合わせて、何度も思いを綴ることを繰り返している。書いたものを読み合うことで、互いの理解が深まり、つながりが生まれる。最後には、劇『かぼちゃのつる さいばん』を、子どもの発言を元に台本を作成した。「子どもの権利条約」の要素を盛り込み、子どもたちが自分の言葉で演じた。「かぼちゃは誰にも守られていなかった」という児童の言葉に象徴されるように、子どもたちは立場を変えて考える力を育んだ。指導書通りの「わがままはだめ」ではなく、子どもが自ら考え、感じ、表現する道徳教育が展開されている。教科書の枠を超え、子どもたちが現実と向き合いながら「命」「権利」「共感」について深く考える貴重な学びの場となっている。

なお、タイトルの「くぐず」は「くぐらせる」の意味で用いているとのこと。

かぼちゃは、僕は最初は、かぼちゃが悪いと思いました。

でも、かぼちゃは、誰にも 守られていなかった。

(子どもの作文より)

「学びを綴る」を繰り返しました。まず、自分がかぼちゃの立場に重ねて考えた子。犬や蜂のように周りの人に厳しすぎる言い方を反省する子。「子どもの権利条約」を学び、かぼちゃの命が守られなかったことへの抗議を感じた子。かぼちゃが誰にも守られていなかったことを痛切に感じ取れた子。教科書が求めた程度「わがままはだめ」をはるかに越えた深い学びが感じ取れた。

[レポートより]

昨年に引き続き、書き綴ることが、単なる言語の習得にとどまらない、子どもの人間的成長の大きな支えにつながることを、実践で見事に証明したものだが、道徳教育分科会で同様の発表をされるということで、本分科会では簡単な討議にとどめた。

◇僕が授業したとき、子供たちは、農家さんにかぼちゃのつるに、「道路に出ないようにしなきゃだめだよ」と言ってあげたいとか、「トラックにも『気をつけて』って言ってあげたい」とかと言う。一年生でもそうやって気づくようなものを、「わがままするな」と型にはめ込もうとするひどい教材だ。

◇「かぼちゃのつる裁判」が面白いと思った。裁判なら、どちらの立場にも立たなければいけない。こちらの立場から見たらわがままだけど、あちらの立場から見たらどうなの？——きっと、かぼちゃの側に立った方に子供たちは共感するだろうが、それぞれの立場を考えるとというのが、とてもいいなと思った。

[参加者の意見より]

(6)生徒が書く「仕事の話の聞き書き」

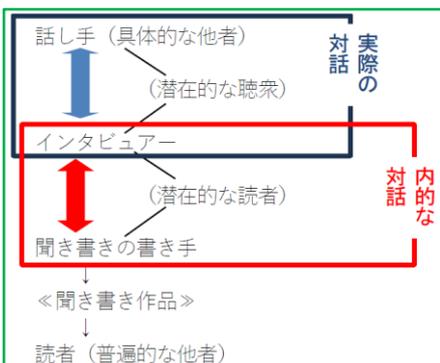
池田和彦 (深川西高等学校)

「聞き書き」とは、他者の話を一人称で表現する文章形式。全教第1回全国教研で報告された、兵庫県の藤本英二氏の「仕事の話の聞き書き」の実践が広く知られる。これを若干アレンジし、3年生の学校設定科目「国語教養(実用国語)」で実施した実践記録。

聞き書きとは何かを解説し、過去の作例を紹介する。その後、教室にゲスト(管理職や実習助手が多い)を招き、インタビューの練習を行う(写真右)。

その後生徒はインタビュー相手を見つけ(両親が多いが、最近はネット上の知人もかなり見受けられる)インタビューを行い、聞き書きを執筆する。最初のうちは2000字以上という字数の多さに愚痴をこぼす生徒も、気がつくともそれ以上の字数で書き上げていた、というケースが多い。

レポート後半は、聞き書きの文の陳述性の特徴を実際の作例から導き出すことで、それを作品の執筆に役立てることができると考えた結果の検討である。藤本氏が指摘する「二重の三極構造」(左の図を参照)を意識することで、執筆する文章の「語り口」がみえてくる。現在形の使用は語り手の主観を表現するうえで効果的である。また、命令形や希求形などの使用は、読み手を一気に語り手と同じ空間に引き込む効果がある。これらを、作例を通して、執筆に役立たせたいとの思いがある。



特にS君の感性がK君の理解を広げ、互いに補完し合う学びが実現された。特別支援学級の子どもたちでも、適切な支援と構造的な読み取りを通じて、文学の深い理解と自己の内面への気づきを得ることができることを実証した、見事な実践である。

賢いけど無口で自分なりの感想を持つのが苦手なK君と、感性豊かで実は理解力があるけど、気分屋で面倒くさいことをやろうとしないS君との3人での文学作品の授業。どうしても一問一答的な展開になりがちであったが、まるで3人でおしゃべりをしているような文学談義をするような、テレビの前で思い思いの感想を語り合うような雰囲気での時間でした。高学年での特別支援学級の担当は初めてのことでしたので、これはこれで自分にとっては貴重な楽しい時間でした。

〔レポートより〕

ファンタジーを、ただ「不思議な話」として終わらせない、現実を超えた世界に描かれた現実をよむ確かな授業（学習指導要領に忠実なままでは絶対にできない）に、称賛の声があがった。

◇最後に「僕」は変わったのか？ 教科書の設問でもあるのだけど、生徒は「変わっていない」ととらえている。教科書は変わったように見せたいけれども、気づいてないから、変わっていない。ファンタジーという技法で、「僕」がぼんやりと生きている、いわば「僕」の鈍感さといったものをあらわしている。だから、子どもたちは言葉としては十分語りきれてはいないかもしれないけど、結構気付いているのではないかなという感じがした。ファンタジーの分析を丁寧にしながら授業だったからこそだと思った。子どもたちが「きつね」の側の気持ちになったというのも、「きつねの窓」の世界にちゃんと入っているからこそ、自然な流れだったと思う。

◇小学校で授業は受けていないが、幼いころに何度も読んだことがあり、愛着のある作品。こんな授業を受けてみたいと思える、素晴らしいものだった。

〔参加者の意見より〕

授業を創造する——困難な現場を乗り越えるために、さらなる工夫と教師の協同を！

高校から3本のレポート。2本はAIおよびICTの活用の新たな可能性を示したレポートであるが、AIやICTの活用を通じ、生徒の主体的な学びを創造している。また、困難校での指導で悩む若手教員の苦しみの中にも、今後につながる希望を、議論の中から見出すことができたのではないだろうか。

(9)日ごろの授業の様子と悩み

(匿名レポート)

新採用2年目、初めての高1担任に悪戦苦闘。続出する生徒の問題行動に振り回され、授業の成立もままならない。「どこから、どのようにしてよいかかわからない」と悩む日々が続く。そのようななかで、芥川龍之介「羅生門」を、原典の「今昔物語集」とつきあわせてよむ授業を報告された。

レポーターは、自身の授業を以下のように非常に厳しく振り返っている。

生徒のニーズと2年後の理想像との乖離がある。(中略)自分で見つける力、見つけるために考える力、調べる力、人に見せられる(読める字)を書くなどを最低限身に付けてほしいと思う。しかし、進学をほとんどしない現状で、自分の考えがずれているのではないか。この授業を自分が受けていてもおそらく「つまらない」と思う。ここから脱却するためには？

〔レポートより〕

しかしながら、これは決してレポーター固有の悩みではあるまい。ベテラン教員でも困難な状況に呆然とし、精神疾患に陥ったり、時には退職したりすることまで考えてしまうのが、昨今の教育現場の実情である。授業も、こちらの望みと生徒の実情の齟齬に苦しむことは決して珍しいことではない。参加者から、それぞれの経験を振り返りながら、あたたかい励ましの声がいくつも寄せられた。

◇出発は生徒の声を聞くところから。視点をちょっと変えるとすごく楽になる。自己実現がうまくいかない時期が中高生の時代にある。みんな、もがいて、悩んでいるということを生活綴方で引き出しながら、それをみんなで受け止め合うという実践をしている方が日高にいらっしゃる。泣きながら自分を語るの、聞いている子たちも泣いてしまう。行動としては悪い行動をしているけど、心の中でそんなことを思っていたんだということが文章から見えてくる。自分を素直に出せずに鎧を着てカッコつけて悪いことをしている子たちの柔らかい部分を、ちょっと信じてあげて、何か迫り方を変えてみたら、少し気持ちも楽になるのではないか。

◇読み比べという授業の内容が面白い。自分が「羅生門」の授業をする時にもちょっと参考にさせていたいただきたいなと思った。生徒にとって、それが必要だって思えるようになれば、自然に話を聞くと僕は思っている。

(10)生徒と作る国語科のICT授業

鈴木圭子（苫小牧東高等学校）



生徒が主体となる授業を心掛け、ICTを道具として活用する。古典の授業においては、生徒がグループで協力し、スライドを作成する（左の図を参照）ことで、主体的な学びを促進している。発表や質疑応答を行うことで、コミュニケーション能力を向上させるとともに、自己評価や相互評価を取り入れ、学びの振り返りを行っている。また古典のみならず、「論理国語」などでの活用例も紹介されている。また Google フォームを利用した振り返りや小テストも実施している。その一方で、紙媒体の教科通信「言の葉」を発行しているが、鈴木氏の深い知識に裏打ちされた興味深い内容が、生徒の学習意欲の向上に一役買っていると思われる。

昨年の怪我で、自分で思うように動けない期間を利用して、ICTの使い方を学び、授業に取り入れることができた（2024の合研まとめをぜひご覧いただきたい）。昨年および今年の授業を通じて、インターネットを活用し、授業の質を向上させるための思考力を養う重要性を認識するとともに、生徒とのコミュニケーションがICTを通じて深まったことを実感したという。

キーボードを使った方が、紙に書くよりも記述量が増えたり、書くことをいやがらなくなったという例もあります。私の授業の中でも、紙に書かせるとほとんど書かない生徒が、タブレットを使用すると100字の指定文字数を軽々越えてきます。彼に言わせると、字が汚いことがプレッシャーになっている、また簡単に文章を直すことができるので、文章を書くことに対する抵抗がなくなるようです。良い部分は認めつつ、学習の中で手書きの機会をしっかりと設けていくなど、バランスを保つことが重要になってきそうです。今のところ、タブレットを使って、人と人が疎遠になったという感じはまったくありません。むしろ、タブレットを挟んで、色々な話をするようになりましたし、一つの問について、たくさんの生徒に声をかけられるようになりました。（中略）教育の本質さえ見失わなければいいし、生徒の顔を見て話をすればいいのだと思います。【レポートより】

ICTを効果的に活用しながらも、それと従来からの一つ一つの語を丁寧によみ進めたり、生徒の感想を丁寧に掘り起こしていく手法を共存させている鈴木氏の手法に、賛辞が寄せられた。

- ◇グループ学習というと、どうしてもやる子はやるけどやらない子はやらないことが多いのだが、（報告者の）スプレッドシートは本当に手が抜けない。もうやらざるを得ないように工夫をしているんだなと思った。
- ◇（「黒い雨」の読後、広島に実際に行った体験を踏まえて短歌を創作させる取り組みについて）や作品の言葉にあったものを、実体験を通じて、実感としてつかみ、それをまた言葉にして返していく。その取り組みはすごく大事なことではないかと思った。【参加者の意見より】

(11)生成AIは学びを阻害するのか？

戸川貴之（帯広柏葉高等学校）

生成AIが子どもたちの学びに与える影響を多角的に検討し、教育者や保護者がどのように向き合うべきかを、戸川氏は以下のように提案している。まず、AIは学びを加速させるツールであり、使い方次第で可能性は無限に広がる。問題はAIそのものではなく、学びを放棄する姿勢にある。学びの質は「やってよかった」という実感で決まる。外発的動機（評価・競争）ではなく、内発的動機（自分の価値観・興味）に基づく学びが重要である。戸川氏は、生成AIを活用した、国語科における多様な学びの実践を提案しながら、新しい時代の教師は恐れずに使ってみる、完璧を求めず、試行錯誤を通じて学ぶ姿勢が大切と強調する。教師は学習者に「その活動の意味」を問いかけ、内省を促すとともに、具体例を示し、挑戦を後押しする存在だとする。また、学習者から学ぶ姿勢を持ち、常にアップデートするとともに、ツールと人、知識と実践を橋渡しする存在であるとする。これは何もAIを活用するから、ではなく、AIによらない授業においても必要とされる姿勢であり、AIはそれをクローズアップしたに過ぎない、と筆者（池田）は考えている。

実践例として、『源氏物語』浮舟の学習において、学習者が AI を活用して登場人物の心理や物語構造を深く読み解く。浮舟にどのような人生の選択肢があったのかを現代的視点で検討し、入水という行動の背景を多角的に考察している。以下は戸川氏の指導による生徒のレポートだが、導き出されたその結論に、ただ驚くしかない。

浮舟に正解はあったのか？

結論から言えば、当時の社会の中で、浮舟が自力で「入水」以外の方法を実行することは、不可能だったと考えられる。

薫ルート

これが最も「正解」に近かったかもしれない。(あくまで私の意見です)

しかし、浮舟はすでに匂宮と関係を持ってしまい、薫を裏切っています。(浮舟から見た) 薫は清廉潔白さを求める男で、この「穢れ」を知った時、関係が崩壊する可能性があります。つまり、薫を選んで嘘をつき続けることも、告白することも、どちらも地獄だったといえる。

匂宮ルート

これはおそらく飽きられるルートでしょう。

情熱的な匂宮に惹かれる気持ちもありましたが、彼はすぐに気持ちに移るような男です。彼を選べば、薫という庇護者を失い、不安定な愛人として生きることになります。それは薫への罪悪感と、捨てられる不安がある、絶望の人生を意味します。

この他「母に相談ルート」「出家逃亡ルート」など、多様な例を AI とともに検証しての結論である。戸川氏はこのレポートを次のように結んでいるが、この姿勢こそ、生成 AI を避けて通ることのできない現代の私たちの指針ではないだろうか？

生成 AI は学びを阻害しません。むしろ、学びの可能性を無限に広げます。重要なのはツールそのものではなく、それをどう使うか、どのような学びの文化を創るかです。教育者と保護者の皆さん、恐れることなく、子どもたちと一緒に新しい学びの世界を探検しましょう。私たち大人が変化し、挑戦する姿を見せることが、子どもたちにとって最高の教育になるのです。【レポートより】

昨年、戸川氏の実践に対し、「ICTを活用する授業の中で、どのように生徒の人的成長を引き出すかが、今後の課題になってくる」という意見があったが、今年の実践は生成 AI の活用により、見事な成長がみとれるものではないだろうか。

- ◇自分も現在「源氏物語」の浮舟を授業でとりあげているが、浮舟にどのような選択肢があったのかを生徒がまとめたもの(上参照)には本当に驚いた。あの「橘の小島」のくだり(注:戸川氏の学校で使用する教科書には、浮舟の話とすれば傍題とも思えるこの場面しか収録されていない)を読んだだけで、あそこまでたどりつけるとは。これは即、使ってやってみたい。「AIはこう言っているけれど、君らどう思う？」と、逆に投げかけるなどの使い方もありそうだと思う。
- ◇AIは、逆にこういう使い方ができるんだということを生徒に知らせないと、生徒は安直にカンペ代わりにしてしまう。そういったことを避けるという意味でも、早めにこういった事柄を、他の教材でもやってみる必要があると思う。
- ◇AIに古典の本文を打ち込んで「本文を訳してください」と言ったら、結構間違っていることが多い。主語とかが最初からないものなど、なんか全然違う人の話になってしまう。生徒は使うのだし、私達もある程度、生成AIとはどんなものかを知らないといけない。やはりある程度自分でも試してみた方がいいと思った。【参加者の意見より】

まとめ——苦闘の先には、子どもたちの人的成長が必ずある。

今年のレポートは、それぞれの現場でもがき苦しみながらも、本当にそれぞれの先生方が現場で格闘している姿というものが見えてくるものが多かったと思う。授業は、ロボットがやるものではない。私たちが人間として、人間としての生徒に接することができないと、まともな授業にはならないだろう。ただ喋るだけだったら、録音を流しておけばいい。では、どういう授業をやるかという時に、目の前の子どものそれぞれに応じた授業のやり方というのが当然あるから、皆さんがそれぞれ苦労しながら、授

業を工夫している。その苦労している姿が今回、ありのままに見えてきたからこそ、「じゃあ、皆さん一緒に考えましょう」ということになったのではないかと思う。

実践報告を終えての総括討論では、次のような感想をいただいた。

- ◇国語の先生がこれだけ集まって、いっぱい実践を聞くというのはなかなかない機会です。私にとっても楽しくて有意義な時間だった。これからの授業も、ちょっと頑張っていこうかなと思っている。
- ◇国語は、小中高と積み上げてきている教科なので、小中高の連携はとても大事だと思う。今回、小学校と中学校の実践を見させていただいて、高校でも小規模校では特に参考になるものが多く、自分の力になった。
- ◇学校全体として、発達障害などを抱えた子が多いので、小学校の実践での、先生方の生徒と一緒に楽しむ取り組みが大いに参考になった。小学校の先生方は、すごく明るく穏やかに話す方が多く、それも見習うべきと思った。
- ◇オンラインもいいけど、実際に会って話したいなという気持ちの方が大きい。高校の話なんかは、分からない部分っていうのも聞いていてあるのだが、その奥にある気持ちとか言いたいことは伝わってくる。先生たちの話を通して、一貫して子どもと国語に携わるということを改めて今日また考えることができ楽しかった。小学校の先生だけだったら全然わからないことも分かったので、今回もとても良かったなと思った。
- ◇中学校の先生がレポートを出してくださったっていうことが、ほんとうに久しぶりのことだ。あまりにも多忙な中で、この場に参加するだけでも難しい状況の中、非常に楽しく素敵な実践報告を聞いて、とても良かったと思う。
- ◇ベテランの経験豊富な方でさえ、現場の困難さにもがき苦しむ。それは例えば人の資質の問題では全くなく、構造的ないろいろな歪みなどが、出しやすい人のところに出てきている。苦しんでいる人は全国各地にいっぱいいるし、そういうところで、色んな人の経験を学びながら、自分が苦しいというのは、自分が誠実な教師であるからこそこの苦しみだ。自分を責めないでほしい。全道教研のような場所で、繋がりながら支え合いながら、一緒にやっていけたらなあと思う。
- ◇若い先生方が何人も参加していただいて、本当に嬉しかった。自分も教員振り出しのころは、授業がもうとにかく辛かった。その時にある組合の先生が「合同教研っていうのがあるよ」と誘ってくれて、本当に小学校の先生、中学校の先生、高校の先生、保護者まで来ていて、「いや、これはすごいなど。これはなんか勉強になるな」と思って、僕はそこから組合に入って、それからは必ず毎年教研に行くためにレポート一つ書くと決めてやってきた。そういう刺激とかいろいろな仲間とかに支えられてやってきたという、そんな思いもある。また、ベテランの先生方の渾身の実践報告をいっぱい聞いて、すごい刺激を受けた。

忘れてはならないのは、今回の実践のほとんどは、「話すこと・聞くこと」「読むこと」「書くこと」といった、学習指導要領によって切り分けられた分野に分割できない（＝分割されることを拒否する）ものがほとんどであった、という点である。これらを切り離して、個別に指導したところで、生徒の人格の完成に資するものは何もない。また、ICTやAIを、安易に是か非かだけで考えるようなステレオタイプの議論も、まったく無意味である。学習指導要領に基づく貧弱な言語観を脱却し、ことばと真剣に向き合うことで、子どもたちの人間的な成長を支える国語教育を、わたしたちはこれからも追い求めていきたい。
(文責：池田和彦)